

中国電力高圧送電線松江・知井宮
線新設工事に伴う発掘調査報告書

洞善寺遺跡・峯寺山要塞群・元極楽寺跡

—— 付・元極楽寺の諸像について ——

1993年3月

大東町教育委員会・三刀屋町教育委員会

序

この度、中国電力株式会社島根支店による特別高圧送電線の新設工事が実施されるに当たり、関係町村の三刀屋町、大東町で埋蔵文化財の発掘調査の必要が生じて参りました。

この送電線工事は八雲村より出雲市知井宮までの区間で、昭和62年より調査が行なわれてきましたが、その結果、大東町の洞善寺遺跡、三刀屋町の峯寺山要塞群より遺物・遺構が検出されるなど数多くの成果を上げることができました。

大東町、三刀屋町ともに豊かな文化財に恵まれ、各時代に亘る多数の遺跡が分布しており、その保護・保存には特に意を注いで参ったところではありますが、地域の開発に当たっては文化財保存との調和が不可欠の問題であります。

ここに調査の実施に際し、中国電力株式会社島根支店の格別のご理解とご協力に対し、深甚なる敬意を表する次第であります。

なお、本発掘調査報告書の刊行にあたり、島根県教育委員会文化課の懇切なるご指導、並びに、地元関係者の皆様の情報提供等、多大のご協力を頂きましたことに深く感謝申し上げます、刊行のご挨拶といたします。

平成5年3月

大東町教育委員会 教育長 小川喜義
三刀屋町教育委員会 教育長 若槻喜吉

例 言

1. 本書は、1991(平成3)年度から1992(平成2)年度の2ヶ年にわたって、大東町教育委員会及び三刀屋町教育委員会が、中国電力株式会社より受託して実施した特別高圧送電線松江知井宮線新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 調査は次の組織で行った。

(1) 1991(平成3)年度

洞善寺遺跡発掘調査

調査主体 大東町教育委員会

事務局 小川喜義(教育長) 別所武夫(教育次長) 松田 勉(社会教育係長)

調査員 杉原清一(鳥根県文化財保護指導委員) 藤原友子

調査指導 丹羽野裕(鳥根県教育庁文化課主事)

作業者 俵佐藤組 糸原勇雄

峯山要塞群跡発掘調査

調査主体 三刀屋町教育委員会

事務局 若槻喜吉(教育長) 谷戸邦夫(教育次長) 名原定雄(社会教育係長)

調査員 板垣 旭(主事)

調査指導 丹羽野裕(鳥根県教育庁文化課主事)

作業者 俵佐藤組 加藤陽一 坂本廣由

(2) 1992(平成4)年度

報告書作成事業

事務局 大東町教育委員会

小川喜義(教育長) 別所武夫(教育次長) 三原英男(社会教育係長)

元極楽寺跡測量調査

調査員 狩野 弘(大東町教育委員会社教指導員)

角田徳幸(鳥根県教育庁文化課主事) 池調俊一(同)

3. 本書の執筆は、杉原・板垣・狩野・丹羽野・角田が行い、文末に担当を記した。また、極楽寺所蔵の仏像については、的野克之氏(鳥根県立博物館主任学芸員)に玉稿を賜った。

4. 本書の編集は、杉原・板垣・角田が行った。

目 次

序 文	大東町教育長 小川喜義 三刀屋町教育長 若槻喜吉	
例 言		
I 調査に至る経緯	(丹羽野裕)	2
II 遺跡の位置と歴史的環境	(杉原清一)	4
1 地域の概況		4
2 調査地点について		8
III 洞善寺遺跡の調査	(杉原清一)	10
1 調査地点について		10
2 微地形と各区の状況		10
3 遺構と遺物		13
4 小結		14
IV 峯寺山要塞群の調査	(板垣 旭)	16
1 配置の概略		16
2 調査の概要		17
3 小結		18
V 元極楽寺跡の調査		23
1 調査の概要	(角田徳幸)	23
2 元極楽寺跡にかかわる伝承	(狩野 弘)	26
3 現極楽寺跡と仏像	(狩野 弘)	27
付 元極楽寺跡の諸像について	(的野克之)	28

図 版 目 次

1 洞善寺遺跡 遺構と遺物……………15	7 元極楽寺跡出土土師質土器……………34
2 峯寺山要塞群調査風景……………20	8 木造大日如来坐像(金剛界) ……35
3 ◇ 土層堆積状況……………21	9 木造如来形坐像(伝釈迦如来) ……36
4 ◇ 柱穴検出状況……………22	10 ◇ (伝宝生如来) ……37
5 元極楽寺跡……………32	11 ◇ (伝阿弥陀如来) 38
6 ◇ 西方平坦面と古墓……………33	12 木造大日如来坐像(胎藏界) ……39

I 調査に至る経緯

昭和61年、中国電力㈱（以下中電という）は、増加する電力需要に対応するため、八雲村から出雲市に至る特別高圧送電線松江知井宮線の新設を計画、各市町村教育委員会に埋蔵文化財の対応について協議をもちかけた。これを受け、八雲村、大東町、三刀屋町、出雲市の各教育委員会は分布調査を行い、その結果かなりの遺跡および要注意地が存在することが明らかになった。一方、各教委および中電から別途相談を受けた島根県教育委員会では、広域にわたる事業のため統一的取扱いが必要と判断し、昭和62年から調整の窓口となることとし、遺跡および要注意地について再度の踏査を行った。

こうした踏査の結果、埋蔵文化財に対する何等かの対応が必要と判断された箇所は16ヶ所に上ることが明らかになった。その内容は以下の通りである。

1. 全面的に発掘が必要な地点 No51, No53, (以上大東町) No77 (三刀屋町)

No51, 53は城跡と推測され、特にNo53は小規模ながらも主郭部に当たっていた。またNo77は古墳らしきものが確認された。

2. 試掘調査が必要な地点 No1, No9, No22, No24 (以上八雲村) No57, 59, 60 (以上大東町) いずれも近辺に古墳があったり、平坦地が見られる地点で、発掘が必要と判断。

3. 周辺測量実施の上、対応協議 No39, 40 (以上大東町) No70 (三刀屋町)

大東町の2地点は、県指定有形文化財となっている大日如来（現在はこの山の中腹に下りている）安置の寺院があったと伝えられるところで、多くの平坦地が見られる部分の一部である。No70は尾根上に連なる郭群の一角と考えられた。いずれも遺跡の範囲が広範囲で設計変更等は無理と考えられ、測量により鉄塔位置が遺構部分にどの程度かかるか検討した上で対応を協議することとした。

4. 工事中立会を要する地点 No12, No13, No14 (八雲村)

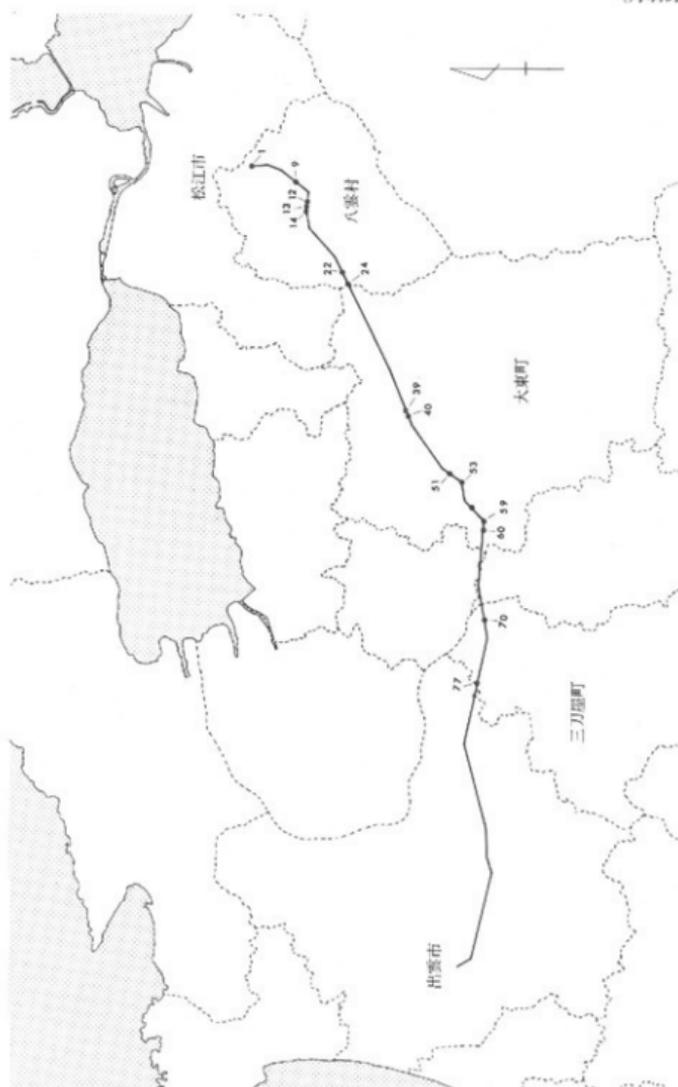
以上の結果を受け、県教委、市町村教委、中電で協議を行い、教委側からは遺跡と判明している3箇所、特に城の主郭に当たるNo53と、地元の信仰の対象ともなっているNo77について設計変更するよう申し出を行った。

その後、電力事情の変化により事業が中断されたが、平成2年にふたたび事業実施の運びとなり、ふたたび県、市町村、中電とで協議を行い、調査面積も限られていることもあって平成3年度より各町村で調査の対応を行うこととなった。この間、中電側も設計変更等の検討を行い、No1, No53, No77については建設予定地を他の部分に移動することとなった。

平成3年度には八雲村のNo9, 22, 24の3ヶ所の試掘調査と、大東町No51（洞善寺遺跡）、三刀屋町のNo70（峯寺山要塞群）の本調査を実施し、4年度には八雲村のNo12, No13,

No14の立合、大東町の3基の工事立会を行い、その内No39（元極楽寺跡）については測量調査を行なった。

(丹羽野裕)



第1図 中国電力特別高圧送電線
松江知井宮線新設工事ルート図

II 遺跡の位置と歴史的環境

1. 地域の概況 (第2図)

計画された送電線鉄塔は、八雲村界の大東町大字須賀地内から西南西へ、加茂町南端をかすめ木次町北端で斐伊川を渡り、三刀屋町北部を西へ大字高窪から出雲市西谷町へと通過するもので、この間約22kmである。これは斐伊川の支流赤川の中上流域を主とし、斐伊川中流部の西山陵地帯に及ぶもので、いずれも比高の高い丘陵上に計画されている。

計画ラインに沿って概観すると、山陵上には中世城跡が処々に配置され、山岳寺院跡も点在する。

赤川沿いの神原、三刀屋川下流の給下、斐伊川沿いの斐伊には前期古墳が知られており、赤川中～下流域では平坦地を見下ろす丘陵端に中小の後期古墳や横穴があり、そして麓には集落跡が認められる。

また大東町大字仁和寺と木次町大字斐伊は奈良時代以降郡衙が交互に置かれ、当時の大原郡の中心となったところである。

このようにやや広く遺跡の分布をみると、次のように時代とグループ区分ができよう。

1) 縄文・弥生時代遺跡

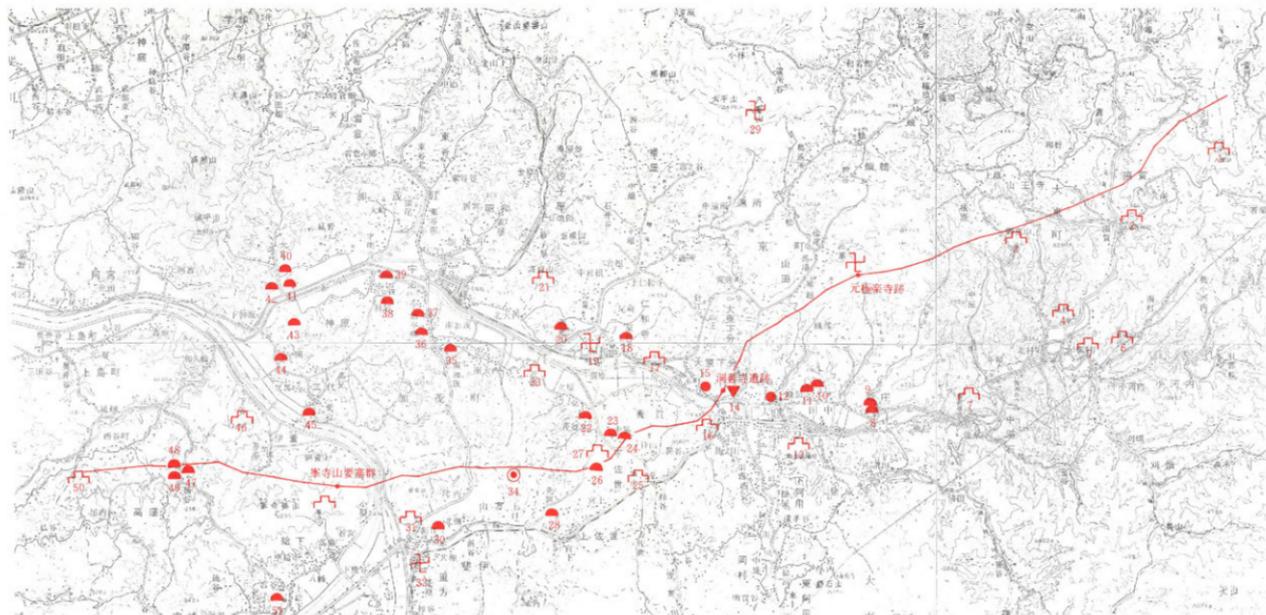
この範囲においてはあまり顕著ではなく、赤川中流部の大東高校グラウンド遺跡(12)(又下・輪ノ内・角田遺跡を含む)や大字田中の丘麓付近で若干の遺物採取地点が知られているのみである。

2) 古墳時代の遺跡

前期古墳は神原神社古墳(39)松本1号墳(51)が斐伊川中流域の古式古墳として著名であり、さらに近年調査された斐伊中山古墳群(30)がこれに加わる。また公園工事により大部分が消滅した神原正面遺跡(38)は弥生墓から古墳への推移を示す墳墓群として稀少な重要遺跡であった。

古墳時代後期には連坦地に集落が展開し、これに臨む低丘陵端には中小の古墳や横穴群が急増する。顕著なグループを列挙してみると次のようである。

1. 加茂町大竹・神原(赤川水系)後～末期
猶里(40)穴ノ前(41)王尾谷尻(42)沢平(43)横穴群
2. 加茂町神原・宇治(赤川水系)中期
宇治寺ノ上(37)焼荒神(36)三本松(35)古墳群
3. 大東町仁和寺(赤川水系)中～後期
高塚(20)諏訪神社(18)古墳群



第2図 高圧送電線計画ラインと周辺の遺跡

大東町

1. 高津場番城跡
2. 須賀城跡
3. 御立山城跡
4. 河内山城跡
5. 高平城跡
6. 三笠城跡
7. 竹城跡
8. 宮尾古墳群
9. 平古墳群
10. 諏訪殿古墳群
11. 鞍馬寺横穴

12. 大東高校グラウンド遺跡
13. 丸子山城跡
14. 洞善寺古基
15. 馬田寺遺跡
16. 奥明礮跡
17. 岩館城跡
18. 諏訪神社古墳群
19. 屋敷薬新造院推定地
20. 高塚古墳群
21. 高麻城跡
22. 平山横穴群
23. 御堂山横穴群

木次町

30. 斐伊中山古墳群
31. 城名種山城跡
32. 斐伊郷新造院跡

加茂町

24. 上畑古墳群
25. 佐世城跡
26. 山伏塚古墳群
27. 小木戸城跡
28. 勝田迫横穴群
29. 八十山寺院跡
33. 近松城跡
34. ハツ鞋古戦場跡
35. 三本松古墳群
36. 焼荒神古墳群
37. 宇治寺ノ上古墳群
38. 神原正面遺跡
39. 神原神社古墳
40. 猫里古墳
41. 穴ノ前横穴群
42. 玉尾谷尻横穴群
43. 沢平横穴群

44. 高鞋古墳
45. 三代古墳

三刀屋町

46. 伊豊城跡
47. 後谷古墳
48. 苗代迫古墳
49. 蓮地古墳
50. 竹ノ内礮跡
51. 松本古墳群

4. 大東町下佐世(佐世川)末期

平山(22)後室山(23)横穴群 上垣古墳群(24)

5. 大東町田中・新庄(赤川水系)後～末期

諏訪殿(10)宮尾(8)平(9)古墳群

6. 加茂町三代(斐伊川水系)中～後期

高畦(44)三代(45)古墳

7. 三刀屋町高畦 後期

後谷(47)蓮池(49)苗代迫(48)古墳群

古墳時代を中心にした時期の集落跡としては、大東高校グラウンド又下、角田遺跡や仁和寺地内などが大きい。

やがて古代国家の体制が整い郡ごとに郡衙が置かれて奈良・平安時代の行政・文化の中心となっていた。大原郡では先ず大東町仁和寺に置かれ、やがて木次町斐伊に、そして再び大東町仁和寺へと移ったとされている。そして両者とも在地有力者によって新造院や新造院尼寺が建立され、木次町斐伊郷新造院跡(32)ではその礎石が現存している。

また平安時代から鎌倉時代には神社や仏教が隆盛となり、この地域でも多くの寺社がその基礎を築いた。

このころの山岳寺院跡として大東町八十山寺院跡(29)高峯・極楽寺跡や三刀屋町峯寺等があり、また郡衙のほとりは京都仁和寺領が、加茂町加茂中には京都加茂別宮が勧請され、さらにこれらを拠点に各系列の寺社が多数造営されたものようである。

3) 中世の遺跡

鎌倉時代承久の乱後、その功勞によって全国的に地頭が補任された。当地においても大東町海潮に神中沢(のち牛尾)氏が、三刀屋町古城には諏訪(のち三刀屋)氏がそれぞれ入部して地域に勢力を扶植し、やがて出雲地方の主要な国人衆へと成長していく。

またこの範囲内では在地の有力者として、佐世氏・馬田氏・鞍掛氏・大西氏などの名が挙げられる。そして各氏はそれぞれ拠点となる山城を築き、区域内には支城や砦を配備して中世末まで地域を支配していた。また、山岳寺院もその一翼となっていた場合も多い。

区域内の主な城砦についてみると次のようである。

牛尾氏……………三笠城(6)高平城(5)河内山城(4)竹城(7)須賀城(2)御立山城(3)

大内氏の陣地…高津場番城(八雲山)(1)

馬田氏……………岩熊城(17)→丸子山城(13)→奥明砦(16)

佐世氏……………佐世城(25)→小城戸城(27)→城名榎山城(31)

鞍掛・大西氏…高麻城(21)近松城(33)小門谷砦

三刀屋氏……………じゃ山城・三刀屋城→峯寺山要塞群・伊萱城(46)

竹ノ内砦(50)

古戦場としては前原～仁和寺地内や、ハッ畦(34)などが伝えられ、各所に墓地や供養塔が散在する。

2. 調査地点について

送電線鉄塔計画地が上記の遺跡に隣接したのも多くあったが出来得るかぎりこれを回避変更された。しかし次の3ヶ所についてはこれが不可能であり、試掘又は発掘調査を行うこととなった。

元極楽寺跡(計画塔No.39):大東町大字新庄

現在は尾根伝いに約1km下った位置に移されて堂宇があり、指定文化財の大日如来坐像ほか5体の古仏が安置されている。もともと極楽寺と称した寺院であったとのことで、跡地は山陵頂部から尾根上約100mの間に削平段4面が認められ、かなりの規模の寺院跡とみられる遺跡である。古代に始まる山岳寺院の一つであると思われる。

洞善寺遺跡(計画塔No.51):大東町大字大東

赤川に向かって北から張り出す低丘陵端の頂部で、大字大東下分との境界線上である。小字地名が「洞善寺」で麓には寺跡と伝える民家があり、付近には古墓群(14)がみられる。

また北の隣接地は字「馬田寺」で、中世の領主馬田氏の本拠と思われるが、現在は宅地等の造成で旧状は知るべくもない。しかし土器片等が多く出土した所(15)と伝えられており、より古くからの集落跡かと思われる。

両者の間の尾根上にはマウンドが数基並び寺院奥の修法塚か或は小形の古墳かとも思われるものが所在し、また尾根の一部は掘り切りで切断し独立丘となるなど中世館砦を思わせる遺構が認められる。

このように古代～中世の複合した様相の遺跡である。

峯寺山要塞群(計画塔No.70):三刀尾町大字伊萱

この要塞群は古刹峯寺の後背尾根上を中心に北～東方面に展望の優れた物見砦群で、各尾根端の各曲輪を網羅する構成で、守城を含むものである。



第3図 叡寺山要塞群縄張図

勿論本拠地は三刀屋城（じゃ山城）であり尾根筋路で峯寺に連絡している。

調査か所は砦群の最頂部に近く曲輪が段状に構成された中核的な部分とみられる地点である。 (杉原清一)

参考文献

大東町の遺跡Ⅰ-Ⅱ	大東町教育委員会	1989～1991年
加茂町の遺跡 — 神原地区—赤川地区—赤川以北—	加茂町教育委員会	1988～1991年
三刀屋町の遺跡Ⅰ・Ⅱ	三刀屋町教育委員会	1988～1989年
島根県遺跡地図	島根県教育委員会	1987年
日本地名大辞典・島根県	角川書店	S 54年

Ⅲ 洞善寺遺跡の調査

1 調査地点について（第4図）

送電線鉄塔No51計画地点は、洞善寺遺跡のうち丘陵上に点在するマウンド（小古墳又は修法塚）群の外縁部である。ここから稜線上北方には中世に由来すると思われる掘り切り遺構があり、東側に谷を下ると古墓群があり、麓部には民家（家号洞善寺）となっている。このように中世～古代遺跡の複合する区域内に位置することとなる。

計画された敷地は稜線から東斜面へかけて約22×22mであるが、鉄塔の脚部は10×10m四隅に2×2mの基礎を掘削するものであり、この部分について発掘調査を行った。なお各グリットの呼称は方位によりN・E・S・Wとした。

因みに工事計画書の脚位置はA B C D脚とあり、それぞれ次のように対応する。

Nグリット	A脚部	Sグリット	C脚部
Eグリット	B脚部	Wグリット	D脚部

2. 微地形と各区の概況（第5図）

発掘地点のすぐ北西は一段高い削平段地形で、W区から南南東へは幅約2mの狭い稜線となっている。この稜線の西斜面は40度以上の急な削り下し面で、下方は開墾畑となっており、東側は鉄塔計画の部分で小さな谷奥にあたる30～35度の急な自然斜面である。

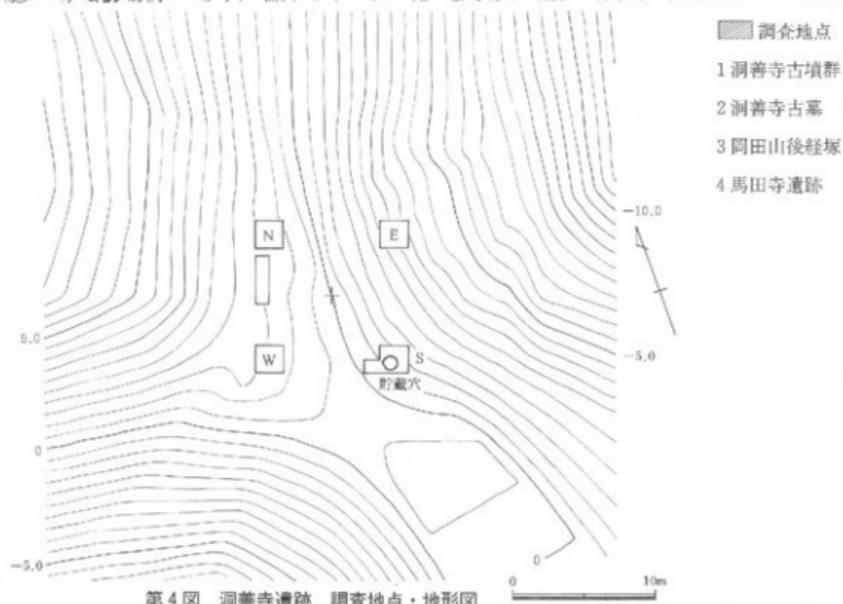
Wグリッドは稜線上にあるほぼ平坦な部分で、薄い表土の下は固い風化花崗岩の地山心土が削平されていたが遺構等は認められなかった。

Nグリッドは約5勾配で東に下がる斜面であり、このあたりから下方は急斜面となっている。薄い表土の下には移動したやや暗色の砂質土（埋土）が厚さ約10cmあり、その下には旧表土である黒色土（クロボク土）が50cm以上も厚く堆積し、その下面は渐变して地山心土へと移行し、自然堆積の状況を示している。

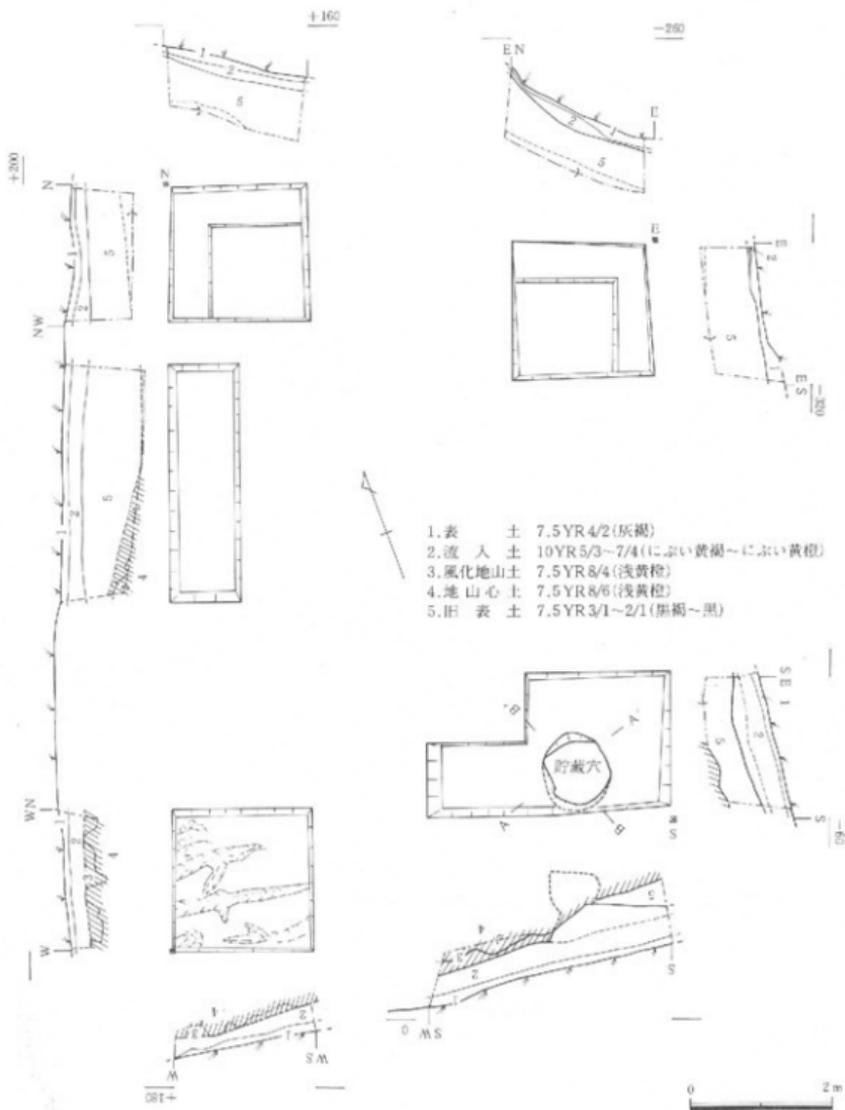
またW方向へ延長したトレンチ断面においても同様であり、いずれも遺構等は認められなかった。

Eグリッドは斜面最下方の位置で、土層序はNグリッドとほぼ同様であるが、黒色土は60cm以上と最も厚く、すべて自然堆積である。

Sグリッドは稜線上から東斜面に移行する部位であり、その斜面の局所的な緩斜部分において厚さ30cmほどの流入堆積土（黒色土）の下にわずかな削り整地地面があり、地山に深く掘り込んだ円形袋状で深さ80cmほどのピット遺構1基が造られ、内部から土器1個体分が検出された。



第4図 洞善寺遺跡 調査地点・地形図



第5図 洞善寺遺跡発掘区の状況

3 遺構と遺物

1) 遺構 (第6図)

検出したピット遺構は東北東方向の下方の谷間に下る斜面の上端付近にある。

一部地山真砂土に達する削り斜面を造り、ピットはその奥端は真砂土地山から、側面部分では黒色土中から掘り込んだものである。

床面は平坦な90×100cmの円形で、奥壁上端では約18cmオーバーハングした袋状であるが、前方の谷間から寄り付き部では壁高がわずか10cmほど立上がるものである。このように削り出した斜面に直径80～85cmの円を描いて袋状に掘り込み、床面を直径100cmほどの円形としたプランのものであった。

また、ピット前端から下方の谷間に向かう

黒色土面には固く締まった部分があり、踏圧された面と思われたが、通路としては明瞭ではない。

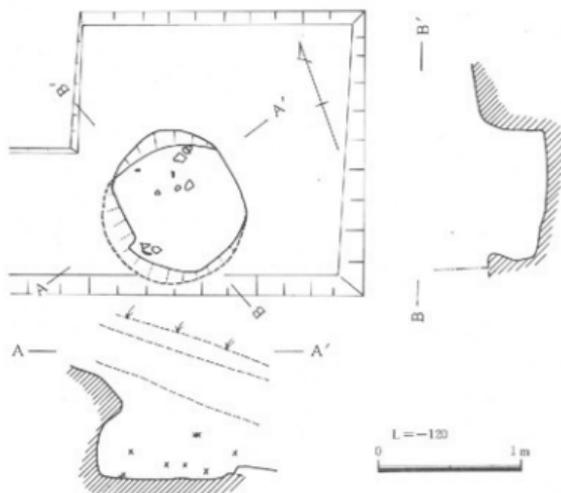
ピット内で奥壁近い床面も土器底部片が、またこの上方には胴～口縁の破片が、流入した黒色土に混じって検出された。これはピット上の庇あたりに置かれていた土器1個体が潰れて落下したと思われる出土状況である。このほかには何らの遺物も認められなかった。

ピット内には自然流入した黒色土が詰まり、さらにその上に上手から削り出した地山土の交じった土が堆積していた。

2) 遺物 (第7図)

出土した遺物は接合の結果、土器1個体のみであった。

この土器は、口径12cm、器高13cm、底径4cm、平底の小さな甕形である。口縁は短く、強く外反しやや尖る。



第6図 洞菩薩遺跡 遺構図

胎土には石英・長石の細粒砂を含み、焼成良く黄橙色を呈している。内面は削りの後磨いたものようである。外面は指頭で扱き整形し、口縁部は横方向にナデ仕上げしている。底面はやや粗面で厚く、やや不整形である。

刷部外面には二次的に熱を受けた部分があり、口縁部にかけて煤の付着も認められ、煮沸用として用いられたことを示している。

この土器は弥生時代中期後半の所産とみられクテチョウ遺跡出土例などに類似するものである。



第7図 洞蕃寺遺跡出土遺物図

4 小結

検出した遺構は、小さな谷間の奥詰まりの斜面に造られた袋状ピット1基である。

わずかな削り斜面から掘り込んだもので、食料貯蔵用の用途が推察されるが、貯蔵物そのものは検出されなかった。またピット前端には踏圧された面が認められ、下方谷間から登ってきて使用されていたものと思われる。

遺物は穴後方の庇上に置かれていたと思われる土器1個が、転落しているのが検出された。この土器は弥生時代中期後半ごろのもので、貯蔵穴の時代を示すものと考ええる。

一般に貯蔵穴は住居の後背あたりの排水のよい斜面地形に設けられることが多く、これに倣えば谷間下方に伴う住居跡の存在が想像される。

大東町における弥生時代遺跡は必ずしも顕著ではなく、その意味に於ても好事例といえよう。

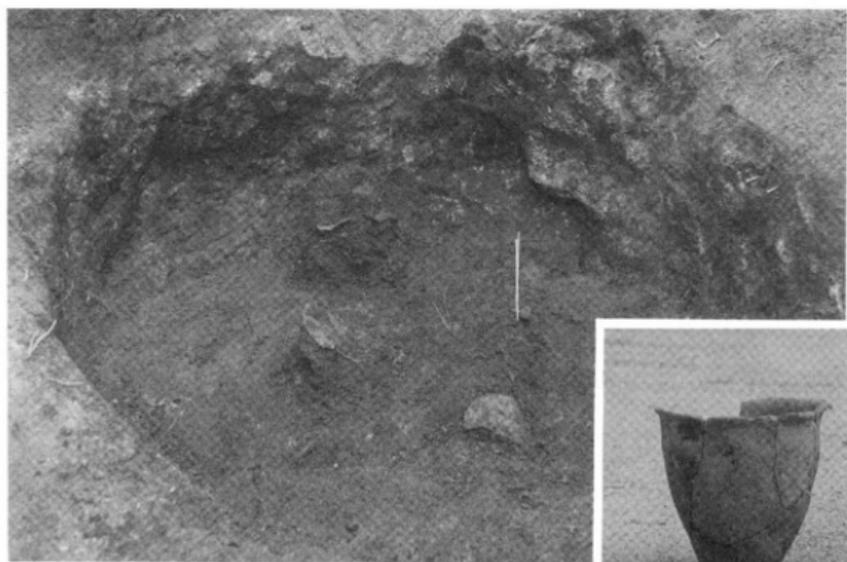
(杉原清一)

参考文献

- | | | |
|-----------------|-------|----------------|
| さんいん古代史の周辺上・中・下 | 山本 清禰 | 山陰中央新報社刊 S 55年 |
| クテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅲ | | 鳥根県教育委員会 1990年 |



洞善寺遺跡貯蔵穴完掘状況

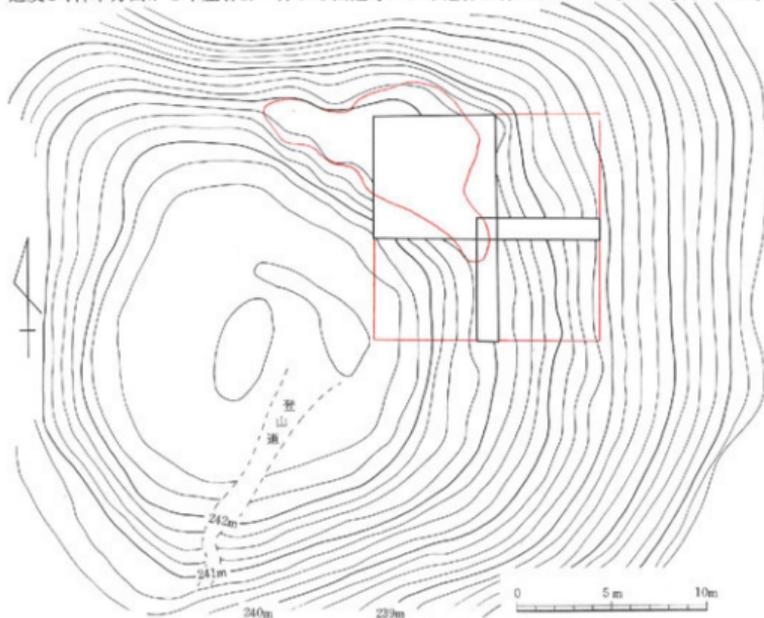


洞善寺遺跡土器出土状況と土器

IV 峯寺要塞群の調査

1. 配置の概略

峯寺とは一山の総称である。現峯寺は峯寺山（「出雲国風土記」にいう伊我山、弥生ともいう）の南斜面に本堂、観音堂、庫裡、行者堂、仁王門、阿巖院、降魔場を残すのみであるが、この峯寺山周辺の調査を行うと山頂を軸として派生する尾根筋に山道がはりめぐらされ、その周りに点々と加工段、平坦地が確認される。（第3図参照）これが盛時には四十二院を誇ったという峯寺の伽藍の遺構であるとともに、戦国期にて三刀屋城を中心として山城が数多く形成された際の遺構でもあったと考えられる。これらの遺構は大きく5群に分かれることがわかる。すなわち今回の発掘調査を実施した山頂部に当たる平坦地群（法歌谷群と呼ぶ）、山頂西北部に広がる平坦地群（中屋谷群と呼ぶ）、山頂北東に広がる平坦地群（声ノ窓群と呼ぶ）、山頂東側裾野に広がる平坦地群（高垣群と呼ぶ）山頂東南に広がる平坦地群（寺谷群と呼ぶ）であるこれらの平坦地群は山頂の法歌谷群を中心として衛星状に配置されており、峯寺馬場・大門より続く馬場道や東高丸方面から伸びる山道及び、神木方面から中屋谷群へ伸びる山道等により連係が保たれていたものと考えられる。



第8図 峯寺要塞群調査地点地形図

2. 調査の概要

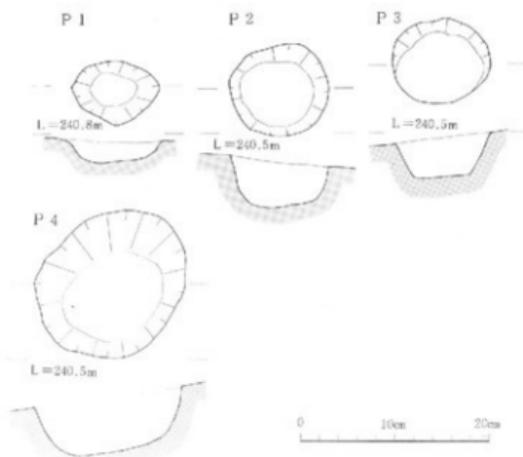
本遺跡は前述した法歌谷群の東部にあたり、その地番は三刀屋町大字伊壺1061内3である。調査前の表面観察において丘陵上に2段の平坦地が確認された。うち上段の平坦地については今回の開発区域外であるため発掘調査の対象外とした。下段の平坦地は上段を主部とした曲輪状の施設と考えられ、南東から北西方向に約4m・東北から南西方向に約6mを測る不整形な台形を呈するもので、中央部の標高は241.01mである。

調査は開発区域内12m×12mの範囲に南北に直交する幅1.0mのトレンチを設定することにより、調査区を4分割し、北西部をI区、南西部をII区、南

東部をIII区、北東部をIV区とした。このうちI区は今回の調査の主となる下段平坦地に位置するため、全面発掘調査を行った。II区からIV区にかけては幅1.0mのトレンチ（東トレンチ、南トレンチ）を掘削することにより、遺構の存在と土層堆積状況を確認するのにとどめた。

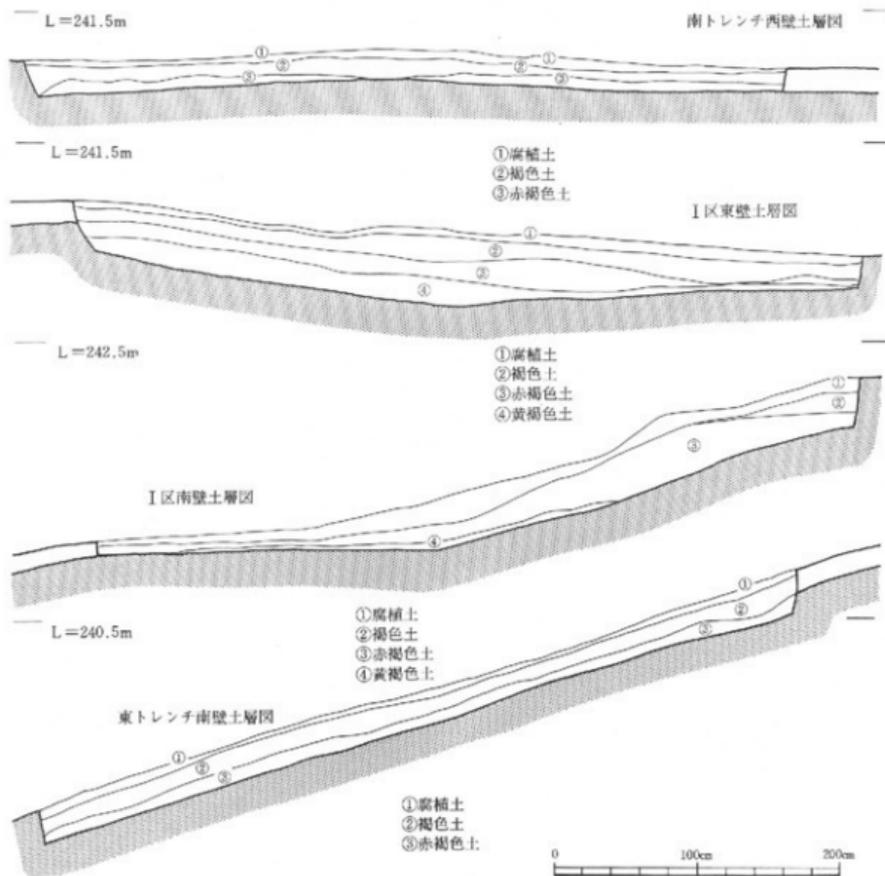


第9図 峯寺山要塞群遺構配置図



第10図 峯寺山要塞群I区内ピット実測図

I区は一辺6.5mの正方形調査区である。中央付近で約90cmの段差により、ほぼ南北に2つの平坦面に分けられる。この平坦面の南側上段は約4%、北側下段は約6%の緩やかな勾配により傾斜している。遺構としては平坦地上段よりピット1穴(P1：径23cm・深さ6cm)、下段よりピット3穴(P2：径26cm・深さ12cm)(P3：径25cm・深さ10cm)(P4：径40cm・深さ15cm)を検出した。これら



第11図 峯寺山要塞群土層図

ピット群のうちP2・P3・P4間は主軸方向を東西に持ち南北に傾斜する平坦面に直交する。P4の覆土内より少量ではあるが炭化物が含まれており掘立柱建物の存在が考えられる。遺物の検出は認められなかった。

3. 小結

峯寺要塞群は昭和62年(1988)の三刀屋町遺跡詳細分布調査により、その存在が確認された。峯寺は古来より真言密教の霊場として、また出雲修験道山伏の根本道場として栄え中世には尼子・毛利ら国主の尊崇をうけながら盛時には四十二坊堂を連ね寺観を誇ったが

数度の戦火にあい、伽藍堂宇、古記焼滅の悲運に遇っている。同時に中世から戦国期にかけて地元豪族三刀屋氏²⁾(諏訪部氏)が時の世情にあわせて軍事勢力を飛躍させた時期であり、永録年間に三刀屋氏による修造の棟札が確認されていることから、当時峯寺と三刀屋氏とは密接な相互関係が成立していたものと考えられる。今回の調査によりこの要塞群が寺域防衛の施設なのか、戦国期の三刀屋城を中心とした広域規模の軍事施設によるものなのか明確にするには至らなかったが、いずれにしても時世の勢いに対応しようとする整備体勢を検証する上で興味深いものがあった。I区内より検出されたピット(P2、P3、P4)は何らかの人為的施設を裏づけるものであるが、平坦面の構造は加工が少なく不整形で簡略な作りであることから、陣立てをするような構えを持った郭ではなく、戦闘の最前見張り所的な施設であったと推定される。

(板垣旭)

注

1. 「三刀屋町の遺跡Ⅰ」三刀屋町教育委員会 1988年1月
2. 「三刀屋城跡調査報告書Ⅰ～Ⅲ」三刀屋町教育委員会 昭和57-59年
3. 「三刀屋町誌」三刀屋町誌編纂委員会 昭和57年



峯寺山要塞群調査前



峯寺山要塞群調査風景



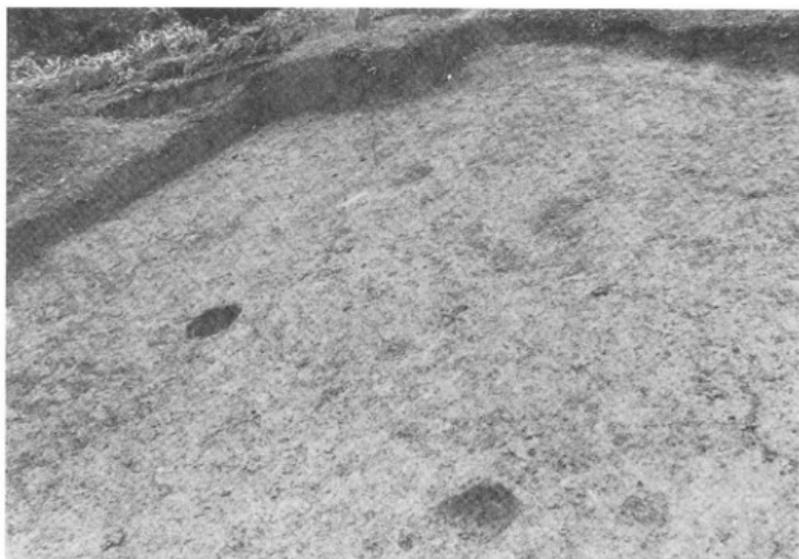
I区東壁土層堆積狀況



I区南壁土層堆積狀況



I 区南柱穴検出状況



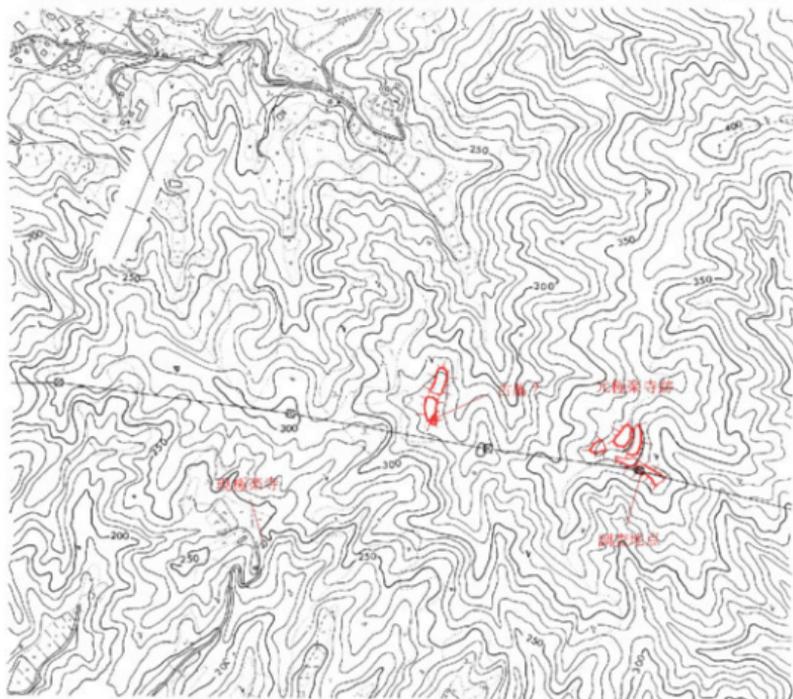
I 区内柱穴検出状況

V 元極楽寺跡の調査

1. 調査の概要

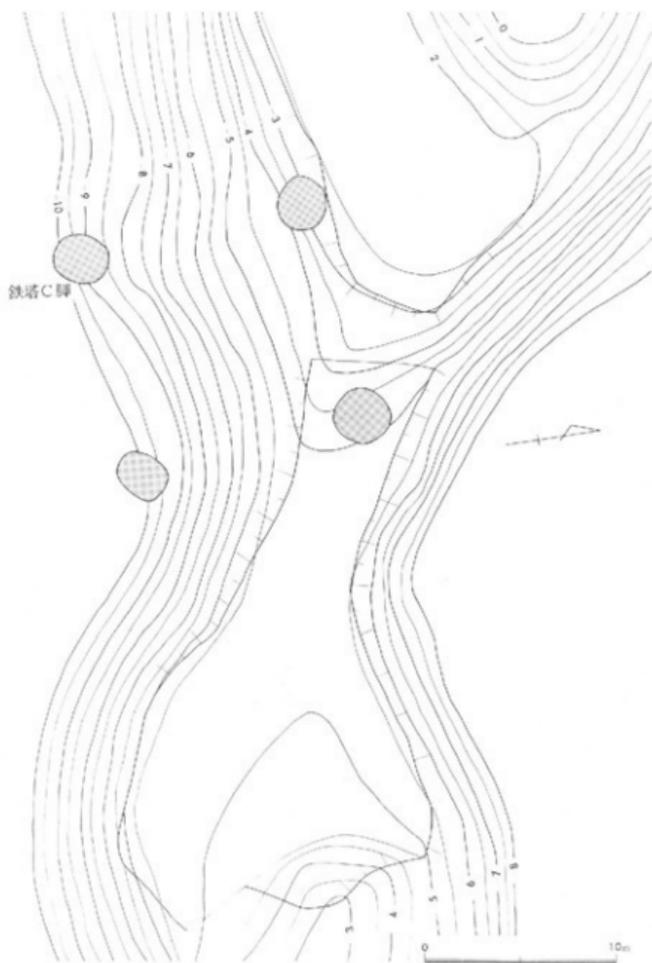
元極楽寺跡は、大原郡大東町大字新庄字切石谷に所在する。遺跡は、高峯山（標高411m）に連なる標高385mの山頂部を中心とした5段程度の平坦面によって構成されている。平坦面は、山頂部の平坦面より東側に3段、西側に1段あり、規模は山頂部のものが南北28m・東西16m、東側のものは上より順に、南北30m・東西12m、南北11m・東西33m、南北16m・東西30mあり、西側のものは南北16m・東西12mで、いずれも地形に沿う形で造成されている。また、この地点より西側約250mの地点にも、南北2段に造成された平坦面があり、上段平坦面の南端には小さなマウンドが認められる。マウンドは後背に溝を有しており、径5.5m、高さ1mで円形を呈し、古墓または経塚と思われる。

調査は、元極楽寺跡の最も東側に位置する平坦面の一部と、その下の斜面に送電線鉄塔が建設されることになったことから、掘削工事に立ち会う形で、遺構・遺物の有無を確認



第12図 元極楽寺跡位置図

することとした。掘削場所は鉄塔の脚に限られるため、径2～3mのグリット4ヶ所で立会をしたのみであるが、平坦面付近では表土下の堆積は薄く、表土下20～30cmで地山に達したものの遺構・遺物は確認されなかった。斜面では、表土下40cm程で地山を検出し、遺構はみられなかったが、鉄塔C脚の地点から平坦面より転落した土師質土器片が出土した。



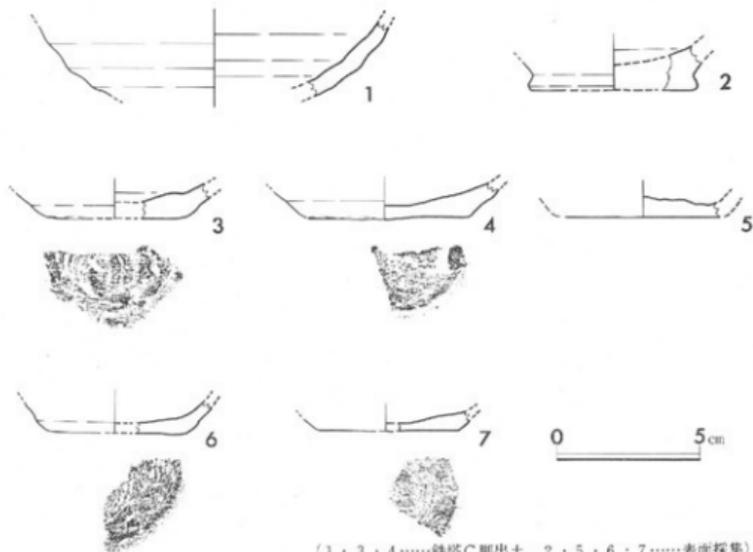
第13図 元極楽寺跡測量図（一部）

土師質土器片(第14図)は、C脚の地点だけでなく、斜面でも表面採集できるが、いずれも坏の小片である。1は、丸味を帯びた体部の破片で、内外面に回転ナデがみられる。胎土は3mm大の砂粒を僅かに含むが密で、焼成は普通、色調は淡褐色である。2-7はいずれも底部の破片で、回転糸切り後、調整は加えられていない。2は復原径6cmで底部が厚く、胎土は僅かに砂粒を含み、焼成は普通、色調は灰褐色である。3-5は復原径が順に5cm・5.7cm・6cmで、内面に回転ナデがみられる。胎土は2mm大の砂粒を含んでおり、焼成は普通、色調は褐色～暗褐色である。6・7は、復原径が共に4.8cmと小さく、底部が薄いもので、内面に回転ナデがみられる。胎土は細かい砂粒を含むが密で、焼成は普通、色調は褐色である。

以上の土師質土器の時期は、いずれも小片であるため断定することは難しいが、体部に丸味を帯びた糸切り底の坏は12世紀代を中心^(註)にみられるようであり、これらの遺物もほぼこの頃のものと考えられる。

(角田徳幸)

註 川原和人・桑原真治「島根県斐川町西石橋遺跡の中世墓」『古文化談叢』第18集 1987年
 広江耕史「島根県における中世土器のついで」『松江考古』第8号 1992年



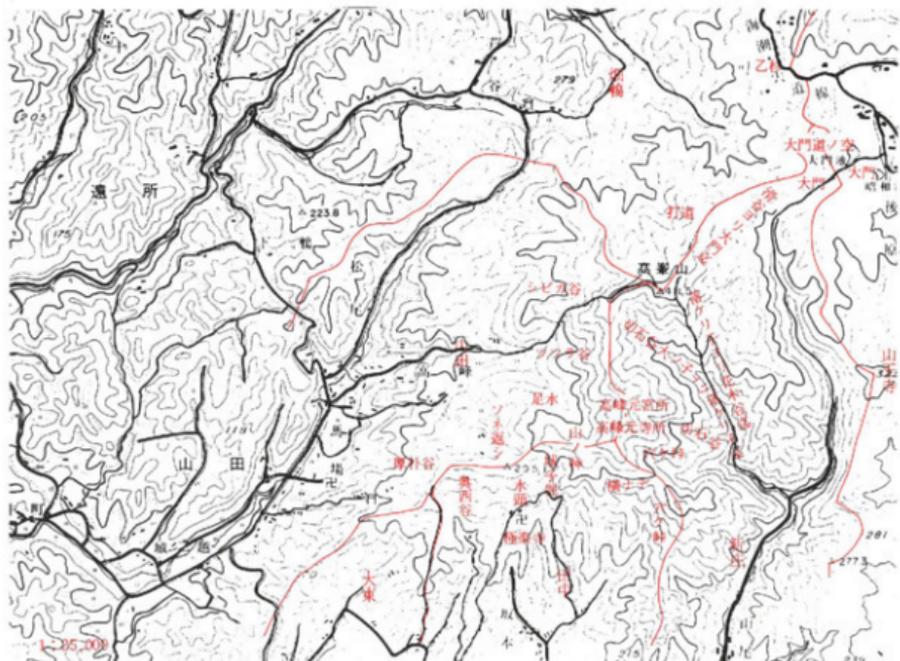
第14図 元極楽寺跡出土土師質土器実測図

2. 元極楽寺にかかわる伝承

古代、山岳仏教が隆盛だった頃、高ノ峰（411m）の峰続きに、極楽寺というあまたの僧坊を持つ大寺があったと伝えられている。

大東町字切図の大字山田（旧山田村）の部には、字「高峰元寺所」、字「高峰元宮所」が隣接して記載されており、大正4年編の大東町治蹟と春殖村治蹟の双方に「大休」の地があり、ここに「極楽寺の有りし所にして寺院の礎石尚存在す」とあって、ほぼ同所であろうと思われる。現在、この地には、篤志家によって「大日如来元屋敷」の石碑が立てられている。また、大字田中（旧田中村）の切図には、山田村との境に字「山ノ神」が見られ、て神仏混淆であったと考えられる。因みに、山ノ神は現在大字田中の熊野神社に合祀されているという。

高ノ峰の尾根伝いに北東方向へ行くと、大字新庄の山尾谷奥と大字山王寺とに「大門」^{ダイモン}の字名が残っており、山門があった名残りではなかろうかとも思われる。北方向の大字遠所にも「大門」が残る。



第15図 元極楽寺跡付近小字図

「忌部総社神宮寺縁起」は16世紀末の作成と推定される古文書で、史料価値については疑問視される部分もあって全面的に信頼することはできないものの、現存する史料として貴重なものである。この文書の最後の部分の要約

安徳天皇の思召しにより出雲國中の勅願寺・祈願社に不動像と経文を国司に奉納するよう命じられたにもかかわらず、国司は他の寺社に奉納せず、岩坂の星上山にのみ納入し寺田まで増領したので、熊野神社検校の呼び掛けに応じ、大原郡室山、蓮華寺山、鴻峯極楽寺、和名佐八十山、來待岩屋寺の各山坊の僧徒神人が忌部に集まり、出雲郷にあった国司屋敷を焼討ちし、星上山の麓から火をかけて星上山の四十余院を焼き尽した。さらに大山寺や三徳山の寺僧と共に京都へ上り源氏方として功をたてた。

鴻峯極楽寺が勅願寺・祈願社であったという記録は現存しないようであるが、この騒動の呼びかけを受ける程、多数の衆徒がいたことは事実であろうと思われる。

3. 現極楽寺と仏像

現極楽寺は、大字田中797の2ほかに字名として残り、その堂は俗に「大日さん」と呼ばれ「寛文八戊申（1668）年卯月建立 天明二龍次壬寅年再興の棟札あり 其後文化十四丁丑年再建立成就」（大東町治蹟）と記されており、中世の戦乱によって寺が衰微したので、元地の屋根筋から中腹の現地へ移転したものであろう。

中腹へ移ってから、寺に属する田や山林がいくらか残っており、地元の坂本谷、西谷の十余戸が信者の合力を得たりして、代々屋根の葺替え等維持・管理に当り、毎年3月28日と9月28日には各家で供物を重箱に詰めて参詣し、祭礼を絶やさなかったという。その間、明治初年の廃仏毀釈の際には、仏像護持のため、ひそかに仏像を急造の笹葺の小屋に隠して難を逃れたと伝える。

大日如来像他の仏像は、昭和26年、文部省文化財保護委員会専門官の鑑定によって藤原期製作の文化財として認められ、昭和35年、その内4軀が県指定を受けるに至った。

平成3年9月の暴風により、トタン覆いの屋根が大損傷を受けたので、以前からその譲が起きていた収蔵庫建設の機運が高まり、300年以上にわたって鎮座されていた字極楽寺の地から、大字田中1267番地に新築の耐火収蔵庫へ移転されることになり、平成4年11月、新収蔵庫の竣工式が行なわれた。仏像は、京都の財団法人の手によって補修を受けることになり、とりあえず大日如来金剛界坐像は平成5年3月に修理を終え、新収蔵庫へお帰りになる予定である。

この項の記述に当たっては、大字田中の吉木義夫、中西正美の両氏から貴重なご教示をいただいた。

（狩野 弘）

付 元極楽寺の諸像について

元極楽寺には、次の通り7軀の仏像彫刻が安置されていた。

- | | | |
|------------------|-----------|----------------------|
| ①木造大日如来坐像（金剛界） | 像高141.0cm | 島根県指定文化財（昭和35年9月30日） |
| ②木造如来形坐像（伝釈迦如来） | 像高84.5cm | ク |
| ③木造如来形坐像（伝宝生如来） | 像高81.0cm | ク |
| ④木造如来形坐像（伝阿弥陀如来） | 像高84.5cm | ク |
| ⑤木造大日如来坐像（胎藏界） | 像高140.5cm | 大東町指定文化財（昭和33年3月1日） |
| ⑥木造菩薩形立像 | 像高155.0cm | ク |
| ⑦木造不動明王立像 | 像高133.3cm | ク |

このうち⑥および⑦の2軀は、相当傷みが激しいので、ここで論じることは省き、残りの5軀に関して論じていきたい。いずれの像も傷みが激しく、後補の部分が多く、当初の印象とかなり異なっているであろうが、現状を次の通り報告しておきたい。

①木造大日如来坐像（金剛界）

像高は141.0cm。一木造りで、全体に後補の漆箔と彩色が施され、目は彫眼。両手を胸前で智拳印に結び、右足を上に結跏趺坐する形で坐る金剛界の大日如来像である。

その構造は、首は三道の下段で割り首とし、現在は鋸で止めている。頭部は耳の後ろで前後に短ぎつける。体部は前後に割短ぎ、両肩から先は別材で造る。両腕ともに肩から肘までと肘から先の2材よりなる。膝前は横木1材から造られている。裳先は欠失している。両腰の部分に三角形の材を寄せているが、現状は後補で、しかも左右ともに3つの小材を鋸で止め組み合わせた形となっており、修理の不味さを物語る。また、全体に鋸が多く使われ、補修が応急処置的な印象を拭えない。内割りは、大きく施されている。

次にその表現について見ると、頭部は、側面から見て渦巻を挿くように大きく宝髻を結び、透かし彫りのある後補の前立を付け、天冠台を巡らす。頭髪を両肩に垂らす。天冠台より下の毛筋は細かく表されている。なお、毛髪部分には後補と見られる白色顔料が塗られているが、現在はかなり剥落している。また、頭部の左側の天冠台から宝髻にかけての短ぎ目部分に後補の埋め木がある。耳は耳朶を垂らし孔を貫通させる。額に後補の木製の白豪がつく。耳と顔全体には漆箔を施し、その上から白豪の真上の毛髪、眉、目、口ひげ、顎ひげ等を墨で描き、白目には白色顔料、唇には朱を施してあるが、彩色はすべて後

補である。

首には三道を刻み、肉胸を若干膨らませる。腹部も若干膨らんでおり、その膨らみを強調するように細い線状に溝を彫る。

条帛を左肩から腹前を横切るように右脇の下へまわし、背中をまわった端を左肩にかけて、腹前で垂らす。裳は両足の太股から脹ら脛を包むように覆う。条帛、裳の衣文はどちらも浅くゆったりと流れている。

両腕に腕釧、胛釧を彫刻により表し、白色顔料を施す。

次に像の制作年代であるが、顔が円満で、伏目がちな目は定朝様式を意識したものである。さらに浅くゆったりと流れる衣文や、奥行きが浅い体軀、宝髻の形など平安後期の像に見られる特徴を所々に持ち、制作年代も平安後期におくのが適当と思われる。

なお、当像は現在美術院において修理が施されつつあり、近日中に面目を一一新した姿に生まれ変わる予定である。

②木造如来形坐像（伝釈迦如来）

③木造如来形坐像（伝宝生如来）

④木造如来形坐像（伝阿弥陀如来）

これら3軀の如来像は、作風構造ともにほぼ同じものなので同時に報告を行いたい、それぞれ寺伝では釈迦、宝生、阿弥陀の尊名が与えられ、昭和35年の指定の際の事由書にもそれぞれ寺伝の尊名が付されている。しかし、尊名が決め手に欠くのでここではすべてを如来形像と呼び、それぞれに括弧付けで寺伝の尊名を付しておくが、本文では便宜上寺伝の尊名を伝付けで用いた。

像高は、伝釈迦如来が84.5cm、伝宝生如来が81.0cm、伝阿弥陀如来が84.5cmで3軀ともに像高もほぼ同じである。

3軀ともに一木造りで彫眼、全体に後補の彩色と漆箔で覆われている。伝釈迦如来は右手を胸前に掲げ施無畏印を結び、左手は膝の上で与願印を結び、右足を上にして結跏趺坐する。伝宝生如来は右手を胸前に掲げ施無畏印を結び、左手は膝の上で手のひらを上に向け蓮座状のものを持ち同様に坐る。この像は寺伝では宝生如来となっているが、むしろ薬師如来とした方がよいと思われる。しかし、ここでは一応寺伝に従っておく。伝阿弥陀如来は右手を胸前に掲げ親指と人差し指で輪を造って施無畏印を結び、左手は膝の上で同じく親指と人差し指で輪を造って与願印を結ぶが、現在左手先が上下逆につけられているため奇異な印象を受ける。恐らく修理の際に誤って上下逆に接合してしまったのであろう。坐る形式は他の2軀と同じである。

構造は3軀ともにほとんど同じである。頭体部を両肩、両肘まで含む一木で造り、背面を割削ぎ内削りを施す。右腕は肘から先を別材、左手先を別材でそれぞれ造り削ぎつける。膝前は横木一材で造り削ぎ合わせ、内削りは施していない。

次にその表現であるが、伝釈迦如来は、螺髪を切り付け、耳朵を垂らし孔を開ける。両目はやや伏目勝に彫成され、鼻孔を開ける。両胸、腹部はわずかに盛り上がりを見せる。衣文は浅く刻まれている。

全体に後補の彩色、漆箔等で覆われている。一部後補の紙張りとも木屎が施されている。全体に虫孔があり、特に頭部、右肩、左腕が著しい。

伝宝生如来は、伝釈迦如来とはほぼ同じであるが、墨で額の毛髪、眉、両目、口髭、顎髭等が描かれているがいずれも後補である。全体に後補の紙張りが見られる。

膝前は横木一材で造り寄せているが、頭体部に比べ極端に虫孔が多く、当初より本像の膝前であったかどうか疑わしい。後世の修理の際に他の像の膝前と入れ代わってしまったのではなかろうか。

伝阿弥陀如来は伝宝生如来と同様に、墨で額の毛髪、眉、両目、口髭、顎髭等が描かれているがいずれも後補である。3像の内保存状態が一番ましなのが伝阿弥陀如来である。

3像ともに構造は一木造りであるが、衣文が浅く、像の奥行があまりなく、膝高も高くなく、しかも頭部が円満であるところから金剛界の大日如来像の制作期とほぼ同じ頃の平安後期の作としてよいものと思われる。

⑤木造大日如来坐像（胎藏界）

本像は現在未指定である。昭和35年の鳥根県の文化財指定の際にこの像は対象とならなかった。恐らく本像が金剛界の大日如来に比べ保存状態がよく見えること、さらに金剛界像に比べ肉体のボリュームに欠けることなどの理由によるものと思われる。実際には本像を子細に観察すると像の全体に木屎の盛り上げや紙張りの修理が見られ、後世の修理のまづさを物語っている。今回むしろ金剛界像より古い像の特徴を持つとの指摘があり、ここでその指摘を参考にしながら像の詳細を報告したい。

像高140.5cm。一木造りで、全体に後補の木屎、漆箔、彩色、紙張りが施され、目は彫眼。両手を法界上印に結び膝の上に乗せる。右足を上に結跏趺坐する形で坐る胎藏界の大日如来像である。

その構造は、頭体部を一木で造り、背板を割削ぎ、内削りを施す。両肩から先は別材で造る。膝前は横木1材から造られている。内削りは比較的浅く施されている。

髻を結っていたのに対し、左右2つずつ大きな房状に髪を束ね結っている。天冠台を巡らす。頭髪を肩の上に垂らす。毛筋は刻まれていない。耳は耳朵を垂らし孔を貫通させる。

額に後補の木製の白豪がつく。

首には三道を刻む。両胸および腹部は膨らみを強調する溝を彫り込んでいるが、あまり膨らませていない。

条帛を左肩から腹前を横切るように右脇の下へまわし、背中にまわった端を左肩にかけて、腹前で垂らす。

両腕に腕釦、臂釦を彫刻により表す。膝は浅い衣文が数多く刻まれている。

金剛界と胎藏界の両像を比較すると、作風が近いがいくつか異なる点が指摘できる。すなわち宝髻の結い方、顔の表現、毛筋の有無、像のボリューム感、衣文の数等である。特に顔は円満で典型的な定朝様式の金剛界像に比べ、胎藏界像はややのっぺりとした顔をしており、衣文は切れのよい数多くの衣文を彫刻している胎藏界像に比べ金剛界像は大ざっぱに彫刻されている。

細部の特徴を見ていくと本像は金剛界像に比べ若干制作年が古いとしてもよさそうである。像の大きさや腕釦臂釦が似ていることから金剛界像は本像を粉本として制作されたとも考えられ興味深い。

以上5軀の像に関して報告を行ったが、いずれも平安後期という県内の仏像彫刻の中でも比較的古い時代に制作されたものであり、しかも、半丈六という大日如来像の大きさは当初の寺院の規模を偲ばすに充分である。

(的野克之)



元極楽寺跡



元極楽寺跡



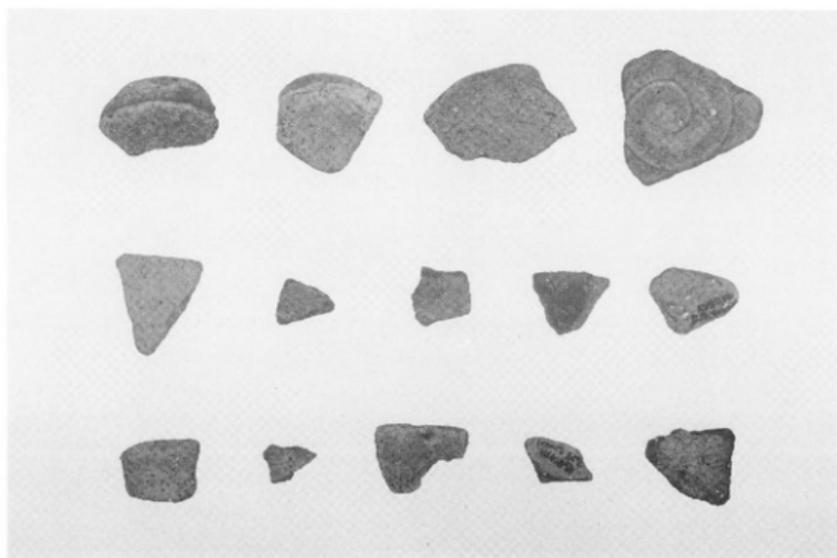
元極楽寺跡西方平坦面



同上古墓



元極楽寺跡鉄塔C 掘出土師質土器



元極楽寺跡表面採集土師質土器



木造大日如来坐像（金剛界）



木造如来形坐像（伝釈迦如来）



木遣如来形坐像（仏宝生如来）



木造如来形坐像（伝阿弥陀如来）



木造大日如来坐像（胎藏界）

中国電力高圧送電線松江知井宮線
新設工事に伴う発掘調査報告書

洞善寺遺跡・峯寺山要塞群・元極楽寺跡

—付・元極楽寺の諸像について—

1993年3月

発行 大東町教育委員会
島根県大原郡大東町大字大東1673-1
三刀屋町教育委員会
島根県飯石郡三刀屋町大字三刀屋944
印刷 曾田印刷
島根県大原郡大東町大字大東1017-1

